

俳句のこと

志 榛 地 区 田 中 陽

地区研修部の松村先生から「何か書いて」と頼まれた。「何でもいいんです。自分の町の自慢でも、旅行記のようなものでも」。

以前、もう二、三十年も前のことで恐縮だが、俳人でもあった伊東の今は亡き園部凱夫先生が研修部長のとき、静岡の部員は詩人の故田中啓三郎先生であったので、俳句をやる志榛地区の僕との三人のコンビは絶好？であった。会館での部会に僕が出て行くのと啓三郎先生は、「エース登場！」などと冗談におだててくれたりした。

その園部部長がある日、「田中さん、俳句のことを書いてくれませんか」という。同じ静岡県俳句協会の会員同士でも、園部先生たちのやられてはいる俳句と僕らのそれとは傾向が必ずしも同じではなかったが、いつもの会話のときのよう先生はニコニコと友情が溢れている。部長の頼みを拒否する理由は何もなく、それに俳句のこ



となら（珠算のこととは反対に）少しは自信があるので、応諾した。すると、先生は「できたら連載で」と追い討ちをかけてくる。それで当時の『そろばん静岡』に「一句を拾う」なる一段コラムがたしか、二、三年はつづいたように記憶する（いま、バックナンバーを探し出せない）。

このコラムは、自分の身近な仲間や作品を主として、時には芭蕉や山頭火などの有名な句も交えて、興が乗ったものを一回に一句だけ鑑賞するという比較的ラクなしごとであった。

珠算の何か行事があつてお会いする各地の先生から、「あれをおもしろく読んでヨ」とか言われると妙にうれしかった。

さて、今回は、昨秋掛川市で行った全国大会―それも、高校生の俳句をも募集し、その入賞作品の高校生たち三十人ほどが出席したユニークな俳句大会だったゆえ、ここに一寸記してみたく思う。

大会のタイトルは「第五十六回口語俳句全国大会」。いま文語で俳句を書く生徒はほとんどいないので、この「口語」という冠は余分のようなのだが、一般俳句界はまだまだ文語主流といつてよい

（ちなみに短歌界は俵万智以後「口語短歌」の流行が進んでいる）。

会場は掛川駅南口近くの「パレスホテル掛川」、十月二十九日。記念講演の講師がたまたま掛川西高出身（中学は静大附属島田中）であつたため、掛川を中心とした周辺の高校生に呼びかけるという企画に掛川市内四校をはじめ磐田、菊川、牧之原、島田あたりの高校生一、二二名（三、八〇一句）の応募があり、われわれを喜ばせた。とくに入賞して出席の高校生に付き添って来られた各校国語科担当の教師らの眼の輝きが、僕には印象的だった。

生徒たちには、先輩でもある講師の俳句講演も聴いてもらい、そのあと表彰に移つたのであるが、一人ひとりに賞状がわりに彼らの作品を揮毫した短冊と、実行委員長手づくり（玄人はだしの技を持つ）の短冊掛けを副賞と共に手渡した。ちなみに最優秀賞作品は、



平和とは一人一人が生きていくこと
「：戦争がない世界、そしてできることなら天災、まして人為的な原発事故などが無い世界を望むという願望が込められている。共感した。」（鳴戸奈菜）と選評された。鳴戸氏は講演講師を兼ねた英文学者・俳人である。そしてこの作品の、名誉の作者は掛川東高校二年生の齋能美里さんという。

なお、後日、当の掛川西高の校長先生から「入賞の生徒諸君は学校としても讃えてあげたいから、俳句協会としての表彰状が欲しい」との電話が入つたので、実行委は早速、五名の生徒の表彰状を作成して同校へ届けた。「スポーツ等ではいろいろと表彰されているが、こういった文化活動で生徒が賞状を貰うことは稀で、これからも大いに奨励したい―これも校長さんのうれしいお言葉であつた。

（この文章は、田中陽氏の著書『そろばん静岡』より引用）